

ちいさな手

謝罪、和解、平和

第26回英連邦戦没捕虜追悼礼拝に参加して



去る8月1日、第26回英連邦戦没捕虜追悼礼拝が英連邦戦死者墓地で献げられました。この追悼礼拝は英連邦戦没捕虜追悼礼拝実行委員会という超教派の団体が主催しているものであり、今年から横浜教区社会委員会が追悼礼拝の紹介をする形で協賛をするようになりました。私自身教区社会委員でありながらこのような礼拝が献げられていることを初めて知りました。礼拝がどんな内容で構成されていて、英連邦戦死者墓地がどんな所なのかは既に9月の第664号横浜教区報

(8月25日発行)に社会委員の方々から記事を書いてくださっているので私はこの追悼礼拝の簡単な歴史と私個人の感想について述べたいと思います。

この礼拝は1995年8月5日、戦後50年を機に、故・永瀬隆氏(元陸軍通訳青山学院OB)、故・斎藤和明氏(国際基督教大学名誉教授)、雨宮剛氏(青山学院大学名誉教授)の三人の提唱により、英連邦戦死者墓地にて最初に献げられました。以来毎年8月の第1土曜日に26年間追悼礼拝が献げられています。謝罪、和解、追悼、不戦、平和の継承というものを柱にしており、英連邦戦死者墓地で眠っている戦死者、戦争捕虜のことを覚え、過去の戦争の過ちを覚え、謝罪し、それを通して和解と平和の道を探っていくことを目標にしています。この礼拝は単純な追悼を越えて、過去の戦争に対する様々な思いを持っている人たちが一つの場所に集い、声を一つにして祈ることを通してそれぞれの痛みを癒す貴重な機会を与えています。

追悼礼拝は神への賛美、み言葉を聞くこととお祈り、献花などで構成されており、そのすべてが神様が望まれる平和への思いに向かっていました。単純にお祈りを献げるだけではなく、そこに眠っている人々の国の人たちと日本人、つまり過去は敵同士になって戦っていた人たちが共に集い、戦死者、戦争捕虜を追悼するというところに大きな意味があると感じました。

礼拝が献げられる英連邦戦死者墓地に着いたときに私が受けた特別な印象があります。それは「ああ、まるで韓国の国立墓地みたいだな」という印象でした。韓国出身だからこそ受けた印象だと思います。韓国はアメリカの影響を受けて西洋風の国立墓地を持っていますが、そこは韓国のために貢献した人たちのための墓地であり、朝鮮戦争のときの戦死者、参戦者はもちろん、歴

代大統領や軍人、殉職した警察官、消防士たち等が眠っています。個人的なことではありますが、私の亡き祖父も朝鮮戦争参戦者なので国立墓地に納められています。

その印象と追悼礼拝に参列した英連邦の軍人の方々の話を聞きながら、ふと思ったことがありました。それは「果たしてここに集まっている人たちは皆同じ気持ちだろうか」ということでした。

その場で献げられる追悼礼拝は言うまでもなく、「戦争無き平和な世界のための祈り」を目的にしています。そのために戦争の被害者である英連邦の戦死者、戦争捕虜たちのための追悼をしています。しかし、よく考えてみると英連邦の方々から見ればおそらく墓地に眠っている方々は単なる戦争の被害者というよりは母国のために戦った英雄でもあるかも知れません。実際に私も韓国の国立墓地に眠っている祖父を朝鮮戦争の被害者と思ったことは、少なくとも韓国にいたときは一度もありませんでした。どちらかと言えば危機から韓国を救うために戦ってくれた祖父として誇らしく思っていました。

戦争によって命を失った人々、大切な人を失った人々、体と心に深い傷を負ってしまった人々のために祈り、平和への思いを高めることはとても大切なことです。しかし、同じ祈りの場においても皆が同じ思いでいる訳ではないかも知れません。いいえ、おそらくそれぞれの思いは明らかに違うでしょう。大事なはその違う思いを語り合うことができることではないかと思えます。過去の戦争に対するそれぞれの思い、戦争の被害者に対するそれぞれの思いを語り合い、互いに理解し合うために努力して、「それぞれの思いは違っても主イエス・キリストが望まれる真の平和を求めて一緒に歩きたい」と告白するときに、この追悼礼拝が追求する和解と平和への道が見えるのではないかなと感じました。

墓碑一つ一つに刻まれた名前と年齢、メッセージを読みながら戦争というものは勝者も敗者もなく、結局深い傷だけを残すということを改めて考えさせられました。墓地に眠っている人たちの命と引き換えに今を生きる私たちはどんな世界を求めていくべきだろうか。生きている私たちに墓地に眠っている人たちが与えている永遠の宿題ではないかと思えます。

(社会委員：司祭 テモテ ^{かんあきとし} 姜暁俊)

光の道を求めて ～コロナ禍の入管被収容者と仮放免者～

猛暑の夏から一気に秋へと向かう秋晴れの昼過ぎ、約一年ぶりに茨城県牛久市にある東日本入国管理センター（通称牛久収容所）に向かいました。

振り返ってみますと、2009年以来、毎年10月には横浜教区社会委員会、婦人会の有志の皆様とともに、入管被収容者面会支援活動を行い、昨年も皆様と訪問した牛久収容所の秋の装いに色づき始めた桜並木道に続く駐車場には、一台の車もありませんでした。正面玄関から入ると消毒薬のしみ込んだマットが敷かれ、手指の消毒薬の設置と消毒を促す張り紙、そして、待合室、面会室に続く管理棟の扉は施錠されてチャイムが設置され、チャイムを押すと職員が検温に現れました。検温済の青いステッカーが渡され、がらんとした待合室に入り、手にした番号札は11番！午前中からの面会者はたった10人しかいなかったことになります。

コロナ禍以前は常時 300 名あまりの超過滞在や難民不認定、何らかの理由で退去強制令の出た難民や移住労働者が収容されており、午前中に面会申請を行っても午後 1 時の面会開始まで待たされることは当たり前であり、午後 4 時の受付終了まで面会希望の被収容者全員に面会することは到底不可能でした。しかし、コロナの蔓延は日本社会のシステム同様入管収容をも様変わりさせ、牛久品川ともに、収容人数は大きく減少、現在は 100 名以下になりました。2017 年～2019 年には、頑なに仮放免許可を拒んだ入管が、一時期、面会制限を行うとともに、三密の解消というコロナ対策のために 4 月からは仮放免申請を次々に許可、一昨年、昨年、面会していただいたほとんどの被収容者＝仮放免を強く訴えていた人々＝は全員がこの 4 月以降仮放免となり収容を解かれました。

しかし、現在もまだ、(日本社会に受け皿整備のない) コロナ禍に施設に取り残された被収容者たちの悲嘆は今も深く、長期収容者もまた多いのが事実です。

当日面会予定の一人、日系ブラジル人男性は再再度の収容、体調不良のために面会室には出てこれず、シャツや下着、週刊誌などの差し入れのみとなりました。一昨年来の度々のハンガーストライキで健康を害した被収容者は 2 週間という短い期間の解放の後、再収容、仮放免、再度の収容という経緯をたどっており、もはや日本社会への不信感にさいなまれる、という状態を呈しております。仮放免保証金はもちろん減額の一途をたどり、10 万円以下、5 万、3 万という例さえあります。

一方、増え続ける仮放免者は、当然非正規滞在に置かれ、何ら社会保障の恩恵にもあずかれないばかりか、特定給付金支給などは対象外であり、最も深刻な問題は仮放免者の困窮にあります。面会支援のみならず、難キ連退職後の佐藤も、長期間仮放免に置かれた難民申請者の生活支援の申請に、相談あるたびに援助団体への扉をたたき続けているのが現状です。

一例をあげれば 3 年以上の収容生活を過ごした、インド人シーク教徒の教師 S さんの解放は、留守を守ってきた妻子に大きな喜びと安堵を与えたものの、貧困と父親の帰宅という安堵も手伝ったのか、大学生の長男はクローン病に倒れ、1 ヶ月の入院生活を余儀なくされ、入院治療費 120 万円余りの請求、毎月の投薬治療は 5 万円弱という苦境に陥りました。佐藤は退職後も難民の相談は細々ながら受けておりますが、2 月には長期仮放免難民男性への生活援助支給への申請取次等もさせていただき、S さん一家救済への申請書を作成、9 月末までに、2 団体から 27 万円の支援を取りつなぎ、10 月末には 15 万円の支援が受けられることになっております。

10 月 3 日には大阪入管収容中に職員たちの暴行によって右腕を骨折した M さんへの裁判で、国側が 300 万円を支払うという和解が成立いたしました。入管収容施設の中はまさにブラックボックスであり、現在は被収容者 100 名足らずになった牛久収容所の中でも、再再度の収容に、また長期収容に苦しむ人々の声が届きます。「帰りたくても帰れない」人々の声に耳を傾け、ともに光の道を探りたいと思っております。

ナオミ 佐藤直子 (柏聖アンデレ教会信徒)

児童養護施設「子どもの園」——コロナに負けず——

子どもの園は、約 40 名の子ども達と 20 名強の先生達が、共に生活する児童養護施設です。平塚

聖マリア教会に属させて頂き、コロナ自粛前までは、毎週子ども達も共に参列させて頂いていました。子ども達の多くは親から虐待を受け、居場所を失い児童相談所を通してやってきます。それらの子ども達のすべてを受け入れ、「皆が共に支え合い暮らす」ということを大切に考えています。最近ニュースで幼い子の虐待による死亡が報道され心痛む事ですが、せめてもう少し早く施設に来ていれば守られたであろうと、思わざるを得ません。

子どもの園では、日頃朝6時に起き、身支度、ラジオ体操、朝礼（お祈りと連絡）と軽いマラソンを終え、朝食、通学と続きます。が、コロナ自粛期間からは、7時起床、朝礼朝食と、休日日課にしました。喜んだのは大きい子と先生達でした。どんなに夜遅くまで子どもと関わっていても、夜中に小さい子に起こされても、朝6時には「おはよう！」と元気に声をかけるのが先生達の大切な役割の一つ。次の日が7時というとなんとなくホッとするのだ。

さてコロナ自粛期間、朝夜各一時間は勉強に取り組む事とし、他は兎に角外で、元気に遊ぶ。グラウンドでは、サッカー、バドミントン。ある日には缶蹴りをする姿が見え驚いた。縄跳び、キックボード、ブレードボード等、子どもの園の中庭に出来た80mのコンクリートロードは格好の遊び場だ。大きな歓声に窓からみると、幼児から高校生も混じってリレーをしていた。2人の幼児がトップ、それぞれ二組に分かれ駆け抜けて行く。速い子、遅い子組み方は見事で、最後のゴールまで楽しめる。何と明るく気持ちの良い雰囲気だろう！ 食事はキッチンと用意され、遊ぶ場所にも相手にも不自由はない。夜はホームで話をしたりテレビをみたり、ゆっくりと日が流れていく。

ところが、徐々に様子が変わってきた。「学校行きたいなあ」「友達ん家へ遊びに行きたい」「買物は？」「行事はないの？」。ゴールデンウィークのチャレンジ行事がなくなったのを始め、夏には、プールも海水浴も。そして何より子どもの園が大切にしてきた清里キャンプが行えない。毎年一ヶ月かけての準備、テーマ決め・グループ決め・グループ旗作り、テント、鍋・ボール・箸に至るまで皆で印をつけ用意する。そして清里聖アンデレ教会のお庭をお借りしての五泊六日のテントキャンプ。ゴミ穴掘りや洗濯干場、仮設水道の設置。大人も子どもも一緒になって^{おおわらわ}大童。清里の教会の方達は、快く迎えて下さり、日曜日には共に守った礼拝の後、心尽くしの昼食を舌鼓を打ち喜んで頂く。お礼のダンスにも力が入る。雨の中の食事づくりには工夫が必要。大人より子ども達が考える。苦勞し協力することで、大切な信頼関係が築けてきた事を改めて痛感している。秋に行われるはずの県下施設対抗の駅伝大会も毎年皆で練習を積み重ね栄光を得てきたが、今年は中止が決定。

こうしてコロナの影響は、確実に私達の生活を脅かし、大人と子どもの信頼関係を築く機会をなくし、今、生活の崩れすら、見え始めている。長年かけて築き上げてきた「子どもの園」のあり方を今一度問い直し、建て直していく必要を痛感している。どうぞお祈り下さい。

ルツ 和田靖子（児童養護施設子どもの園）

社会委員ニュースレター「ちいさな手」第22号 2020年11月23日発行

編集責任者：宣教主事 司祭 サムエル 北澤 洋 編集・構成：司祭 テモテ 姜 暁俊

社会委員：司祭 ダニエル 竹内 一也、司祭 トマス 吉田仁志、エステル 近藤 順子（横浜聖アンデレ教会）